

# 君達に伝えたい事

— 戦中・戦後をどう生きたか —

牧 証 名

はじめに — 小学生の頃 —

私は現在八七歳の青年（？）です。少年時代に遡って、昔を振り返ってみましょう。小学一年生の担任の先生は緑川先生という方でした。二年生の担任は野中先生でした。お休みの日に緑川先生の家に向つたら、畑仕事をなさつておいででした。野中先生は、女性で、新卒の方でした。当時は、男女別学でしたから、私達男子は、野中先生の教卓の廻りに集まつて、先生を取り囲むようにして、ふざけていました。そしたら、先生は泣き出して、職員室に逃げていってしまった。男の先生がやってきて、お目玉をくらった覚えがあります。

五・六年生の担任は高橋先生という方で、とても酷しい先生でした。普通の馬跳びではなく、十人位つながった長い馬を、「どこまで行けるかやってみろ」という調子です。私はガンバツてうんと遠くまで跳ぼうとして、壁に顔面を打ちつけ、前歯を一本おつてしまいました。又、この先生は、組体操で五段位組んで、頂上で逆立ちをさせたりしました。

それだけではありません。一階から二階に昇る階段の踊り場から、私達数名を蹴飛ばして、階段下に落としたりしました。幸い怪我をした者はいなかったのですが、かなり乱暴な先生でした。

## 中学校の生活 — その途中で敗戦 —

### 飯を食うのがひと苦勞の生活

中学校は、「立志・開拓・創作」を建学の精神とする、なかなか素晴らしい学校でした。伊藤校長の時（大正時代の末年）以来、生徒を殴ったり、怒鳴ったりしない、という方針を堅持してきた学校でした。一年生の時のクラス・メイトは卒業まで変わらない、担任も変わらないという面白い学校でした。私はC組でした。現在でもC組のクラス会が行われています。私の家にもC組の級友が二人毎月来て、碁を打って遊んでいます。

そういえば、小学校の頃の同級生二人とも現在も交流しています。一人は内臓外科医をしています。もう一人は、脳梗塞・緑内障で不自由な生活をしています。が、彼は、「妻が倒れたら俺は即死だ」などと言いながら、元気に過ごしております。

### 戦争中なのに、めぐまれた(?) 学校生活を

#### 送れた事に、現在も感謝しております。

恵まれたと書きましたが、学校と先生には恵まれて

いましたが、生活の方は大変でした。何しろ、自分と病身の母親の飯の心配をしなくてはなりません。だから、木工場で働いたり、便所の薬まきなどもしました。夏休み中の仕事で、一〇キロ痩せてしまったのです。

旧制中学の後半から、旧制高校までは、多少叔母の援助もあり、家の貯金もつかって生活していました。旧制中学の国語の授業は今でも「ウン」と唸るものでした。先生が黒板に「天皇陛下」と書きます。「陛下とは如何なる意味か」と先生が問います。「階段の下という意味です」と誰かが答えます。「まあそうだが、もう少し美しい日本語はないか」と再度問いかけるのです。一年坊主の私達は必死に調べましたが、わかりません。「わかりません」と言うと、先生は、「では今日はこれで終わり。この次まで調べてくるように」ということで、五分位で授業を終わって、先生は職員室に戻ってしまうのです。

さて、その次の時間がきました。戸田君だったかな、「きざはしの下」と答えたのです。「なるほど、ところで、下とは何だ」とたたみかけて来るのです。これには困った。誰も返答が出来ません。「では今日はこれ

で終わり、調べてくるようにと先生は言うだけです。次の国語の時間になって、困り果てている私達に先生は、「やむを得ない。今日は教えてやろう。下というのは、…のあたり、という意味だ。直接お呼びしては畏れ多いので、…のあたり、とぼんやり言うのだな。君達のお父様が、どなたかにお手紙を書かれて、〇〇様机下とお書きになるのを目にした事があるだろう。それも同じ意味だ」と言われるのです。

### 建物の取りこわしから勤労働員

#### —強制疎開と旋盤工—

きちんと勉強したのは、一年間でしよう。後半の一年半は、少しグレてしまったので、自分で勉強したという自覚がないのです。さて、二年生になったら、類焼を防ぐという理由づけで、建物の取り壊し作業や、農業の手伝いをさせられました。また、「三八式歩兵銃」を肩に担いで分列行進をするとか、夜間の野営の訓練なども木見川でやりました。

三年生からは、勤労働員というので、陸軍の工場で働きました。始めは八時間勤務でしたが、一九四四年度からは、一二時間勤務になりました。今週が朝七時

から夜七時迄としますと、来週は夜七時から朝七時迄となるわけです。徴兵検査（文章表現力、身体検査などで、兵隊の適性を甲・第一乙・第二乙・丙の四段階に区分する。甲種であれば即兵隊に取られる。私の父は第二乙種でした）の結果によつて区分された、丙種の兵と一緒に仕事をしました。

天井近くを廻っている管に、始業前に旋盤のベルトを掛けねばなりません。私達中学三年生にとつては、いともやり易い仕事なのに、丙種の兵士には、なかなか上手くいかないのです。私達は、ほとんど一回でベルトを掛けられるのに、彼等は五回もかかるのです。「こんな兵隊さんじゃあ、戦争も見こみがない」とヒソヒソ話をしたものです。

### 学びながら働くのも苦学生？

#### —大学生であることと働く事の

#### 調整はむずかしい—

さて、敗戦の年に父親が亡くなったので、私は大学生でありながら、働かねばなりません。二年間は、中学校の教員をしました。今でも、石坂君とか石川君とか思い起こしています。

その後、定時制高校の教員になりました。母親が、都立工業高校の校長会の会長を知っているというので、行ってみました。そんなにうまく運ぶ筈はありません。都立第三商業高校の校長、今村直人先生を紹介して下さったのが、幸いしたのです。今村先生は、私の話を聞きながら「君も苦勞したんだね、ガンバリたまえ、来週から本校の定時制に来なさい」と言つて下さいました。私が今日あるのは、今村先生のお陰です。この一言に尽きます。本当にありがとうございます。

### 校長の一言で、私はグレた

#### — 豹変する知識人の情けなさ —

敗戦の年、工場で働いていた私達に、伝言が伝えられました。「八月一八日に校長の訓話があるから、登校するように」とのことでした。八月一八日、沢登哲一校長は、こう言いました。「雌伏十年、二十年かかろうとも、この恨み、必ずはらさしておくものか。米英に報復する覚悟で勉強せよ」ということでした。私達は「そうだ!」と思つて校長の話を聞きました。

ところが、それから二週間後、校長は、始業式（二学期の）で、何と言つたと思いますか。「この前、君

達に言つた事は間違つていた。あれは取り消す。これから君達は、平和国家、文化国家建設の為に勉強してほしい」、こつ言われたのです。後に解つた事です。この頃、戦争犯罪に協力したことを恥じて、物言わぬ知識人が大多数でした。その中で、「むのたけじ」は、敗戦の日、八月一五日に朝日新聞社を退職しましたし、三木清は、獄中でしたが、九月二六日に亡くなりました。知識人を言われる人は沢山いましたが、誰も声をあげませんし、文も書きもしません。情けないではないですか。丸山眞男にしても、宮沢俊義にしても、何も言わない、書かないのは何故ですか。日本の知識人の奥行き浅さを感じざるを得ません。三木清の伯父は、東大農学部教授、東畑精一氏でした。彼が自分が保証人になると署名押印した文章を提出すれば、三木は解放されたのです。しかし東畑教授は、自分の保身を考へて、署名しませんでした。それ故に、三木は獄死してしまつたのです。

ここがドイツと違ふところです。ドイツでは、監獄の扉を市民が開けました。ところが日本では、市民が監獄の扉を開けようなどとは思いませんでした。

敗戦後、飯塚鉄雄さんという体育の先生が、いらつしや

いました。「メシさんの指導で」バレー・ボールに夢中になりました。飯塚さんは「B Eの精神でいこう」(B E動詞の原形の姿でやろうという意味でした。)と、私達を喜ばせました。飯(メシ)さんは東京文理大のエース・スパイカーでしたが、その人が私達の中学に来て下さって、まことに楽しい運動部の生活を送る事ができました。「男子ばかりでは面白くないだろう。女子校に連れて行くから、張り切つてやれ」などと言つて、私達排球部員を、当時の府立第十高女に連れていってくれました。これが、きっかけで、女子校生と一緒のサークル「紫鏡会」ができて、今でも一年に一回はそのサークルの集まりがあります。「紫鏡会」の意味は、府立五中は、校章は桔梗(紫の花)でしたし、府立第十高女は八呎の鏡だったので、こういう名が付いたのです。

たまたま書きに書いた通り夜間の学校に勤める様になって、ようやく大学を卒業することが出来ました。貧乏人でもやれるぞ、という思いで、大学院へ進学しました。主任教授の宗像誠也先生に、こう問われた事がありました。「君は、夜学で働いているんだって、私の息子は理学部にいるのだが、アルバイトをしてい

る子は一人もないよ、私はあれこれ説明しました。「そうか、そういう事情なら、やむを得ないね」と言われた事を、今でも覚えています。本当の事をいうと、頭に来たのです。「貧乏人は、学問などしなくていい」と言われたと受け取ったからです。学ぶという事は何人にとつても権利です。誰も、これを奪うことは出来ない筈です。恩師に背いて申し訳ないですが、これが私の本音です。

二千五百万人の死者の裁きに応えよう

— 私達は戦争で亡くなった人達に

応えるよう生きているか—

私が静岡大学に勤めていた頃、戦争での死者の数を算えている黒羽君という友人がいました。彼によれば、空襲なども含めて、日本人で亡くなった人は、およそ三百十万人か二十万人との事でした。又、日本軍が殺した外国人は二千二百万人位になるだろう、と言っていました。本当に戦争は酷い事ばかりです。

日本人の死者と外国人の死者を合計すると、およそ二千五百万人を超える数になります。こうして数で示

せば、抽象化されてしまいます。死者には、妻や子もあつたかもしれませぬ。あるいは、まだ結婚してなくて、祖父母や父母、兄弟・姉妹がある人もいたでしょう。今私は、自分の側から見ていますが、向こう側、殺された側から見たら、どういふ感想が浮かぶでしょうか。戦争は、どちらの側から見ても悲劇以外の何物でもありません。私は次の言葉を胸に抱いて生きていきます。

### あの道へ戻るまいとの決意こそ

軍国少年としての教育を受けた私は、「あの軍国主義の道へ、決して戻つてはならない」という覚悟で生きてきました。どうしても、若い方々に伝えておきたい。近年、軍国主義時代の到来かと思われる事が、あれこれ続いております。決して、「あの道」へ戻つてはならない、と人々に訴え続けてきました。まだ充分ではない、もうひとガンバリだ、というのが実感です。どうぞ、この老人（青年？）の言葉を、広く伝えて下さい。共に頑張りましょう。暮らすために、生きるために、平和のために。

（まき まさな・埼玉・所沢市）

## 今年も開催 2017年戦争展

戦争展運動とは一言で「過去の戦争体験を風化させないで、若い世代に伝承し、2度とふたたび戦争の過ちを繰り返さない世論を作り上げること」です。新潟市で開催される第9回戦争展の中心テーマは、

―ウソから始まる戦時体制づくり―

―いつか来た道 教育は今―

新潟県民会館3階ギャラリーBで。

8月11日（金）～13日（日） 9時より

（パネル以外の催しもの）

11日 13時過ぎから

・音楽と書道パフォーマンス

・講演「戦時下で受けた教育」

・詩の朗読

12日 13時半から

・講演「軍学共同の危険な動き」

・歌唱・トーク「戦時中の歌唱とその歌の変遷」

・講演「沖縄問題」

13日 13時から

・講演「治安維持法と原菊枝」

・講演「教育勅語体制の復活を許すのか」

（小東）